

木とわりて見よ花のありのよ
と古歌とえいし給ひければ變化のもの恐るけしきにて何方ともなく消うせぬいともめでた
き歌にこそ

輕口問答の事

○甲斐の國へ一休御下向のとき所の某のねて一休の答話よきこと聞よよし故一休の願作と
まのあたり聞と思ひめしつゝの童にれしゑいひけるには和尙こゝには通りるとき生
座のときいがんも申せ和尙なにどの言句あらば喝といふて立されよといひふくめ教けれとも
聞なれぬ言乗るれり覺がたき貌に見へけるゆゑのさねていひさのせけるには生の字いなま
いふ字なるぞ悠とはいもといんとねたるもの覺へよとねんころにとしへおき一休の御通
りとおそしと待たる所へ和尙何必あく通り給ふとの童のけ出てなまのいもの時いゝんとい
ふ一休取わへす表てもよし焼てもよしと仰ければよしへのとく喝といふ一休こたへてゑぐひ
ると有ければ某どのものしき中に願作なる事と感じられけるとのや

蟻川秀句問答

○一休ひえい山に登り給ふとき蟻川新右衛門といふもの御供申されける折ら彼山へいりし
頃和尙さまへ申上たき句ふとうのみひ問申て見ひいん御付被下とよて
ひえの山路とみるひゆくゝな
とらひもはてぬに
さしどけてふもとに四貫の錢とばらり

とつけ給ふのくいちはやき御願作にてぞありけるそれより山にのぼり給ひて種々の詩歌あり
前集に出したれ
ばこゝに略す

一文や二もん何と思ふなよ阿彌陀も錢て光る世中
金持と十人よせてながむれば中に五人は無學文盲

蟻川
一休

赤飯の答話の事

○一休和尙したしき在家へ御出ありしとき折ふし到來せしとて強飯と奉りけるが亭主こびたる
ものにて兼て和尙の答話とこゝる見んと思ふ折ら幸いと出しけるに遠慮もなく手づゝら
にぎりては喰ひ握りてはくひ好物のよしにしてしたゝる召上られけると扱こそよき折らとて
和尙さませきはんあればむさとは胸と通るましきにそつにまゐるのいゝんといふ一休ら
さぬ風情にてひたものまゐりけるに亭主しきりに一句なくしてまゐるにせんあしひのいゝ
とせめければ其時和尙答へ給ひけるはこれ見られよせきはんと聞のらにゝぎりため手形と
つけて通すほどにいくらにても通る也と仰ければ亭主も理に折てあされはて赤飯と他より
もらひながらこそ見も得せざりけるとのや

極樂の沙汰の事

○一休の御寺へ日頃御出入申ける白俗なるものたゞ一向に彌陀の淨土に生れん事と願ふこゝる
ふありしものありしゝるはとに當時の名僧ときけば八宗九宗のへだてくく足とらさま
になしあまたこなたへ参りつゝ極樂淨土に生せん事の沙汰のみに日とくらしけるあるとき一
休和尙の御寺へ参り申けるはうれのしは淺ましく愚痴暗味の身と生れいへとももたらがたき

佛性といふ具し申上はゆるやうにも修行仕り來世はのならず極樂國へうまれ申たくとろんぞ申す
 誓願ふかく候去によつて四方の能化たちへ参りてはうけ給り候に他の師は十萬八千里のさと
 さあなたに極樂ありととし給ふに一体さまには地獄をくらく目前にありとしめし給ふ遠き
 道のほせに以得は百里や二百里のちがひも有まじきにも候はねせもやうに大相違あるによ
 り某まよひ申は間あはれ此上の御じひに實と示し給となみだとながしくこそさける和尚聞し
 めしされ救迷執ふるさもの爲すは十萬億土と説き悟了通徹のものには目前と説き御經にも
 去此不遠とあるはこそなりぬとのたは俗のさねて申けるふはゆるやうに丁事に御しめしと承
 りいへども終に七寶莊嚴の極樂いはせ尋ね申ても見たる事なくははせにとてもの御慈悲に
 今一句ねんごろに御示しにあづり度こそいへといふ一休さこしめしさればこそ極樂目前に
 ありといふは七寶さうごんのあたちあるはいあらず人の爲に口に説てしめず極樂にあらず人
 と自己に言句とはなれて語り得ずんばしる事あししはく坐禪工夫して見付よと仰られけれ
 ば一本なしとて家にのぬり讀とるふり晝夜あんに暮し明して不斗あはたしくも和尚の寺へ
 參りため息とつささでく目前の極らくこそ見付候へとてさても多の衆生の迷いぞ知らざる
 こそ不便の事にいへ此度こそ悟はひらけて候とて笑とみくみ小おどりして申ける一休聞てさ
 ころあらめとるの面目だにひらけなば何のうたがひか有べきぞ去るがら其方の明らめやう
 はいるんと、ひ給へばさればこそ此極樂と申は貧賤富貴にもよらず老若男女の隔もなく朝夕
 きうりにある事に候といふ和尚打うなづきもつともくよき心得のなさて其極樂に朝夕安坐
 したる心はいるんと聞たまへばされば其事にて候美食蔬飯にのさらず朝夕のそくを樂しみに

たぐる所こそ極樂にていよとさも自慢らしくしうめん作りて申ければ一休も手ごうのてぬら
 ひ給ひけるとのや

俗より弟子と頼れ給ふ事

○一体の旦那にしろなる者ありける此者折々まわりて御物がたりと承るけるがあるとき一子
 出家すれば九族天に生ずるといふ法語とうけ給はりて深くしんじ只ひとりの子とめちたるが
 此小兒と御弟子あなし下されいとしてつれ來りける易き事なりとてへ直さま髪とより落し小僧
 となしのしらと御手にてさらりくなてまわし給へば親は何ぞ有難き御引導もあるべきと耳
 とすまして聞居たるに和尚作り聲してきんになれく牛のきんになれくと三べんまでのた
 まひければ親案に相違し大に立腹して是は曲もない事とのたまふものな佛までは得ならず
 とも菩薩にふれとなりとも定てありがたき御引導も有べきとぞんじの外なる牛の陰養になつ
 て何の益のいぞやとて一休としきりに白眼ける其とき和尚うちわらひ給ひてされば末法の出
 家は行ひ難くして落やすしさるほとに牛のきんはふらくと落さうに見ゆれども一生落たる
 ためしなしたるによつて斯はいふありと仰ければ彼旦那何どの心づきけんいはれと承れば面
 白ありがたくいどて一子と連て歸られける

天の笠と着給ふ事

○關東より一休御上京の折ら然るべき大名と愛しきものどあとになり先になりて登らせ給ふ
 頃しも水無月のそへつあなれば暑氣はなはだしありしのも笠とめめさず歩行給ふの大
 名もあゝるやさしき方にて使ともつて申されけるはあゝる炎天に御坊はな笠とめめさるや

幸に持し合せたる古笠ひもゑこれと着せられよとて笠一ひいさし出させければ一休も禮と正しくして宜ひけるは御心ざしのほど近頃祝者申てゆしあがら此法師は天とゝさになしんへばあつくもぬるくもひはずとのたまふ使の者たちのへりあくと主人に申上ければ大名もいゝさま此坊主たゞ人あてはなさざとて必ず馬のけあげもあけぬやう日蔭とよけて通せよとて猶も同道申けるさて留りの宿とも御のまひなく同宿し給へと申つのはしける故程なく暮に及びぬれば同し宿に泊り給ふ其夜のの大名の御方より使ともつて申送られけるは晝のは笠と参らせんと申たる者にて候旅は物うさものにてゆとに此ころの曇さにさこそつられさせ給はん御酒一献まゐらせんこなたへ入らせ給へと有ければ一休過分の御事なりとて使と案内にて行せ給ふさて奥の間へ通り給へは大名聲とあけ給ひていゝに御坊よ和國のならひ人に逢とさ笠とぬぐとこそ承るにゑにとて笠はぬがせ給ひぬぞと申されける言葉の下よりぬきてものけおくべき處なしゆとのたまひける扱こそ一休和尚よとすいし参らせいよく種御ちさふ申されけるとゝや其席さまくのおもしろき問答なぞ有つれとも聞もらしぬ

稚き時御引導し給ふ事

○一休いまたわすの十歳の御とき師の長老田舎へ行給ひ御留主の處へ旦那うちに相はてたるものありいろき御引導被下度よし使申來りければ御他行にてゆへは御歸りの日限もしれざるよし返答ありしにさひへは御弟子がなにも苦しうらす是非々々とおして頼み早死人と寺へ昇込みける折ふしおとなの弟子も居あはせざりければ一休させしはしやう氣に用意しさて棺に向ひて死人とひびさし次にわが身ともひびさし又兩手とひろげて何のこと棄もなく喝とそなた

まひけるのゝる折ら長老の俄にあり來給ひて物のけより此有さまと見給ひのち此引導のいなる事そとありければ一休申けるはさんい死人ともひびさしたるは汝が死たるゆゑにて申事ろれがしと指さしは此小僧にと申事にて兩手とひろげたるの大なる恥と我にのせたるると申たる事にてゆ也とこたへ給ふなり

泉州塊にて遊女と問答の事

○一休和尚さのひの浦に御越ありしとき其處に旅客と宿する家居のうちに地獄といへる遊女あり此ものゝねて一休和尚の名高きとしり一首とえいし奉る
山居せば深山の奥あ住るよらしこゝの淨世のさのひ近きに

一休其まゝ御返歌

一休が身とば身ほかに思はねば南も山家も同し住家よ

と返歌し給へどもこいつたゝならぬ者とおぼしめしあたりの人あゝある女そと尋給へばあれこそ音に聞へし地獄と申遊女なるよし申ければ和尚其まゝ

聞しより見ておろろしき地獄のな
と遊しければ遊女とりあへず
しにくる人のちちざるはなし

とこたへけるとのや

乞食に小袖と給ふ事

○一休極月の末つら東山よし田といへる所へ御越なされけるのへるに今出川口の河原に丸

禊なる乞食の伏し居たりけるを御らんまでさても不便の者やとればしめし御小袖を二重ぬぎ
て取らせらるゝに此乞食よろこぶけしきなく袖うち通しきたりける一休仰けるは扱もふしぎ
なる乞食哉一錢だふもいたゞき伏たぐひは乞食のなるみなるよるこぶけしきもみへざるは
嬉しくもれもはざるよとひ給へば乞食こたへて申けるの御身のわれに小袖とくれてうれしく
も思ひざるよとこたへければ一休手とうち扱もあやまつたり一大事のさとりこゝなりけるぞ
やいのささき此乞がひ人はたゝ人にはよもあらず愚僧の愚痴とばらしぬることうれしけれとて
たなごゝろと合せ目とよさきてかのみ給ふ其うちにあの乞食は消うせけん小袖はのり残りけ
る不思議ありける事とや

大和峯の薬師御利生の事

○みねの薬師は靈驗あらたなる御佛にて願ひあるもあらざるも参詣の人たへざりけるあるとき
瘡と病る人ありて七々日のあひだはだし参りの願ひも立て毎日くこたたりなくまうでける
すでに四十余日に及べども其しるしなかりければ如来と恨みたてまつりてさんくゝに悪口し
ける折らら一休和尙の御下りと聞しよりいそぎ御迎ひに出でしるゝのよし申上ければ和尙
聞し召し仰けるは如来のれいげん無にはあらずたゝなんぢが身と恨むべしざりながら我いの
り見んとて狂唐一首あそばし薬師へ今ばんまうでゝ此うたよむべしとのたまひければ病人
よろこびいろいろ参りけるが願しも五月中の二日あれば若殿群参のろの中にあるひは現世安穩
後生極樂といのるもあり又南無薬師留理光によらいかゆと助け給へこれとすくひ給へなご
口やあのゝしれバ物さわがしくて心定なちすしはるゝは内院に入て入のしづまるよまぢ

るがやうく深更におよべばみな人下向して燈明の法師と病る人とはあり成ければ併のらた
ぞ出じつゝしんでよみあげけり

南無やくし諸病悉除の願なれば

身よりはとけの名こそとしけれ
とよみもはてぬに内院より時だかさ御聲にして
むらさめはただ一時のものぞらし

かのみものささるころにぬぎかけ

と聞へけり有がたき佛勅やとしばらく禮拜してたち上り見れば身のあさはおちてあともなし
病る人骨すいに通りにて尋く思ひすぐに發心して諸國修行に出ける事とや

一休衆道くるひの事

○和尙は衆道すきにてましくて見あつらへきの飽書こゝのしこみ有といへりされと御心の動
き給ひざる事は駿河の府中に小玉辨之助とて邸に、げあき美童ありけるに和尙ふのく口説給
へせもしたがはざりければ狂歌とれくり給ひける

花は根に鳥はふるすあへれども

人はわらきにあへることなし

よばありにて小辨どのぞある都がたのづくふうと書てつらはされければ御歌のこゝろにや恥
けんしみくゝと御返事申上てそなひち其夜まゐりて御のぞみに随ひ申さんと申上ければ和尙
うなづきよくころ來りたり今朝までさこそ思ひしが今いもはや用事もあしとて歸し給ひける

とや

傾城に御引導の事

○赤坂の宿にいつさといへる名高き遊女ありけるがしばらくの病にて身まわりけりしたしきものども集りて申けるはそれ女は五障三従の罪ふのきにまして流れの身なれば穴のたにてはのなふまじいさや一休和尚と頼みたてまつりて用らはんと御族宿へ参りのく罪ふのき女あて候御なさけお御引導なしくだされいはありがたくこそいはめとひたすらねがひければ一休やと事としてすむあるくしく其家にいたり御引導しける

僧は衣と賣り女は紅とうる柳はみどり花はくれなる

喝どのたまひければ棺のうちより光明のくやくと見へしが刺さへ其夜に日ころしたし、あしたる者ども夢に成佛とげたるよしと告げるとなり又同所に煎茶と往來の旅客にうりて世のいとあみとせし男ありしが病もなくて頓死したると近きあたりの者どもより集り水なととそ、き氣つけなぞ吞せけれども更に其甲斐なりのしるべ折ふし一休御通りありけると幸ひの事として其よし申上御引導と願ひければ

一ふく一せん一期の間末期の一句雲客の話

陽と御引導ありけるが是も往生ととげたりとふしぎにあたりの者の夢に見ゆけると也

大食の御咄しの事

○或とき殊外大ふうといふ男有けるが一休和尚の御相伴の非時と給りけるが和尚の仰けるはさても其方のめづらしき大食あるものたまひければの男いや是れたふるも申はとにくてはな

は某が若き友たちより合のけるくいたしたるとき餅米壹斗つらせ我等一人して食それどもいまだ食たらざりければあたりにも粟もちしたゝの有けるも悉くれども残らず喰盡したるにあまりに腹ふくれたるにより河邊へ走り行大ある舟あると見るより其舟と横にもちて川水とせきとめ申たりと首ふりてのたりければ一休聞しめさてもおびたしき大食あるそれほどの大食はめづらしく去るが愚僧がぞんじたる山伏ありしがこれも大食人にてのけ録して餅米二斗とつめててそれと一人して残らずくらひ余りに腹ふくれけるにや廣き松原へはしり出て三の、ばりのりの松の木と捻折てあしとのけ休みける所へ少さき蛇の大なる蛙とのみくるしけに見えしが起きたりのたはらの見なれさの草と喰けるにぢみくど腹へりたり山伏これと見てさてよき事と見付たる物のあどくだんの草と取て喰けるが運のつきたるにやこのくさ人の消る草にて山伏は忽きへて二斗の餅と、きんそ、のけはら貝金剛杖など餅にもたれたるとのたり給へば彼男顔色とへて恥入早歸りて其のち二たびまらざりけるとのや惣じて狂がる空言はいはざるもの也の男の大ふうといましめ玉ふ處也

化物御退治の事

○北國方へ御雲水ありしときある古き宮に大なる石燈籠のありけるがいくともなく毎ばん燈明ととぼしけるの其燈籠のたはらと大の法師毎夜ぐるりくと廻りけると人皆これと見て恐れすといふものなくされども又誰あつて見とけんといふものなりけり一休これと聞しめし拙僧今よひこれと退治すべしとのたまふに所のものとも大によるこび日の暮るゝと待のねくだんの所へ行て見るに其夜もたがはず燈籠とめぐるとのさ車とまはそがとく皆人申ける



経友則
乃乃乃

五十四



吉野
山
一百
千

乃乃乃
乃乃乃
乃乃乃

五十四

はさても一休房がたいじ有べき由のたまひしかども中々そのしるしもなき事と、りく評判
る所へ又法師一人あらはれて其夜の二人のせめぐるはとみ皆人いよく恐れとあして歸り
しが翌日あくると待て一休の宿所へまゐり御房の御口とは相違して昨夜は化もの又一人ふへ
て中々鎮るけしき見ぬ申さずといふに一休聞玉其一人は拙僧にて夜もそのら追のけ廻りの
るに化ものは階倒しけるはせにもいや今夜よりは出まじさと化もの誓言とたてけるによりも
るし遣したり心易られ今夜より出る事あらしと示玉ふはたしてそれよりは何の怪しみもあか
りけるとやふしきも世にあるとなり

豆の秀句の事

○一休和尚はいたつての輕口にてましませばある地頭の奥方御申越しあつて何とぞ御咄し承
り度よし和尚聞しめし何より安き御事とて早速まゐり玉へば上臈たち居ならひて聞玉ふに和
尙まづ佛説と切口上にて御物がたりありければ上らう衆感に堪ぬ御教化の御はなし有がた
くい得とも余りみじくくて本意なしぬのはくはあらくと退屈する迄御物かたりあれのしと
申されければ一休とももうも望にまのそべき幸ひはなしこそれへ拙僧さる方へ夜咄しに参り
けるにいり豆と菓子に出しけるがたはらよりこの豆秀句となしたべんといふ皆尤もとてま
めの子のまめなやうになど口々に申す中に賢くもあぐ見ゆる人出て申さる、には奥さまの
よしの参りとしてした、のつらみて喰ふものあり人々聞てこれはいかに豆の秀句におくさまの
よし野参りとして心得すいかにく、とせむればさては御ぞんじなきにや井の内の蛙大海と知ら
ぬためしありいづれも御ぞんじのとより當春それがし頼たる人の奥さまよし野へ参り玉ふに

御供してまゐりしに道すがら名所舊跡うちながめさはの川邊井出の里王水などやうの名所つ
よさに見物してはとなく吉野にも成ぬれば山はさなから雪のを見まがふはありなり神肚ふつ
のく残らずめぐりよがみ夫より高き所にのぼりて四方とうちながめ給ふ所にはるに嵐ふき來
て奥さまのぬり笠と谷底へ吹ととしける其ときうれがし深き淵にのぞむがとく薄き氷とふむ
心地して巖といとふてついに取て歸りぬされとも笠は少しはげたるとおくさま御らんじてさ
てもうたての事なとのたまひしるれより立田法隆寺奈良初瀬寺などいふ名所三ツ山だるま
じたるまなとやうの舊跡御見物あつて御上京ありしところへ御一門の御女中の見まひ被成
けるにさも老んしやうなるぬり笠とめしていづれも御越しありけりるれにつけて思し召出さ
れ彼はげたるとぬらせよと仰ありけるはせに塗師屋へあつらゆれば銀三錢目にてぬらんと申
す奥さま聞し召てうれの六のしき事なさらば手ぬりにせよとてうるし屋へ鳥目二疋ともち
てうるしと求めけるにむくろじ程ありけると惣じて奥さまの物事とびた、しくのたまふもゑ
是は少きこのな豆つぶはせありとのたまひけるさこそ豆の秀句に三國一のことのどじまん
らしく申されたりとたり給へば上臈衆退屈して色わるく成にけり

國司へ下帯と遣はさる事

○或御大名の家中に片岡彌太夫といふ浪人の宅に一休ましましけると此所の地頭さつつけて使
者ともつて申上けるの長の旅にゆつたれなさるべく見くるしくいへども私宅へも御入來あり
て御うさと晴し給へかすと申つたはしけれ和尙よくこそ御まねき添けなしてとて使者と、も
に地頭の宅へ参り給へば地頭も本意にや思ひけんさまく御ちさう申上てさて何にても御手

跡々くたされ度と乞ければ一休やすき事なり旅宿へ歸りてした、め進すべしと約束し程番手彌太夫が方へ歸り給ふ引つ、いて使者きたり先ほど御契約申たる御手跡此ものへ下さるべきといひきたれば和尙もあまりせしうや覺しけん彌太夫の書きたる文のありしと使者はぬたし給ふ使者よろこび持のへりて主人に渡しける則ひらきみれば見知たる彌太夫が手跡なり是はふしぎ成とのな使の誤りにてころあるらめと使の者と尋ねれども直々御手より給ひりしといふにさては餘りにいそぎて申たる故御取ちがひありしものにやと又も使ともつて最前下されしは彌太夫が手跡と見ぬ申候願はくは御自身あり、せ玉ふとこそそのぞみにいへと申つゝはしければ一休うゑづき左傳とに深く御望ならばいのでとしみ申べきとした、前に包たる囊とこそわたされける使者もち歸りて主人に渡せばやがて囊とひらき見ればさもよぞれたる古き下帯ふてぞありけるが地頭どのも手とちて笑ひける其のち又も御入の折ふし柳とはらりの大文字にて一字のさきて送り給ひぬ又ふるき屏風は何ともわたりの知れぬ繪ありけり古く成いて見分申さず私親どもが申つるに馬とや牛とのやらんにて御座いよし申さるれば和尙牛ならば角あるべし角あければ馬なるべきぞとのたまふ亭主申されけるには御筆の次手は此繪にも讀とあるばし下されよと申されければ易きとどのたまひて大文字にて馬とやげなとを遊にける其繪今にありていともめで度御殿におさまりて寶物の其一つとぞ成たるとぞ

長咄に退屈せしもの、事

○さて和尙さま先夜の御はるしのおもしろくいへともあまり長き御はなし申えたいくの仕候何とぞ今夕はみじろさありがたきとわれくともにてもわらひ安き御咄して御聞せ下されぬと

と一座のものとも御願申上げれば一休いにもよきいなしありきき、やれど日本にあらぬのち天竺までもこの上もないありがたきものは飯と汁とやげな何と書わらつたのくくくと御あれた

大俗問答の事

○ある時出入の下男こゝろお思ひけるには此寺の一休さまとは今での知識者として皆々たがひて見へるが問答とやらんと聞に何でもない事いふて御ぢぎして歸らるゝ我等も和尙ともんともして見んとふと思ひ付て和尙さまに御尋ね申す男と申ものゝ生れ出るより珍寶と申ものゝ以て出まそが夫と成人して落人とは是如何と申ければ未だ言落もひかぬに金玉と雖ども悪まがとし

兩眼のあちらのなると持ながら女にあへば目なしとぞなる

女房に辨才天とうつくしい美人といふも皮のとなり

子は寶なりとの事

○一休の御寺へ常々御心易く参りたる百姓の元より家賃しきうへに子多くもちて其日も過しがたき程のものとして有けるが和尙のもとへ参りさてく私どもはいる成因果あて候哉御をえとの如く子どもは追々出来まして當年二才に成と下として都合十二人まで出来なし其中にいとし子もござりませ私夫婦のものは日に三度の飯さへ腹に足はせ下された事とてもなく是がまとの子の地獄へおちたぞ申ものゝとぞんじ升れば夫ならばその子が憎と申ものもござりませぬ又やうの貧家へ生れくる子供も不登合の事あるへいよく不登合をせまます是の事

生のひくひにては哉御聞せ下されよと言ければ和尙うちうなづき尤々さりながら下の子に
 いまたニツとおいやればまだくいくたり生まうやらしれぬのならず夫婦のもの、氣とつき
 ぬやふおして有とさにはひとつ處へより寐酒でものもんで氣をはらし仕込では出のし／＼とる
 がよいと仰ければびつくりして和尙さま此上出来ましたら夫婦の者は何と成ませうと申けれ
 ばされは夫に付ていなしある昔奈良の都の頃白木の長者とて日本にたれしらぬものもなき
 大百姓のあつたけあそのとなり丁度なたの様な貧家に種腹ひとつにて十八人の子とも
 つて今其方の申さる、通り親ふたりは正月元日より大晦日まで食の足とすらず隣の大百姓の
 事とちらやみ居けるあある時夏炎天に大勢とあつめ麥とふみのうちのうちは元より門外まで
 にも干ひるけたるに貧者は其麥と見るに付ても此干たる麥むしろ十八まい丈あるならば子供
 に一枚づゝ當わらちなば我等夫婦が此苦しむも有まじきと思ふ事ともしらす子供等はあしに
 まるせてあそび歩行て目のと、く所には一人も居ぬとよと思ふ折らにわらに空のき曇り大
 雷なりはためき大夕だちふりきたり大道忽大河のとくとりて件の干たる麥なる／＼取入べ
 き間もなく獲らすながしたるの隣夫婦の門口へ出ていひせんと思ふ所へあちらこちらよ
 り走り歸りけるもゑ頭の前と員見れば一人も不足なく利格別身ともぬらさ、りける依て
 昔より子どもは貧じやといふ程に出のしやれ／＼其長者といへるは大和國十市郡天の香具山
 の東北にすこし高き岡山と長者やしきといひまた其わきに白木塚とも塚箸ともいへる塚あり
 是の其時の長者主人は元より家内出入ものまで一飯とに其はしと捨てふた、ひ用ひされば其
 捨たる箸しせんと山となりしとて箸つゝといひて今にあり又佛説の中にも鬼子母神と云るの

三千人の子と持給ふ其うち一人と隠され夜刃と成給ふと云る事もありきて歌讀て給はりけり

親となり子と成くるも今ならず二世も三世も盡ぬ契のすもなき子と賣人もありと聞く
 親ではなふて鬼の再來親は過去わが身は現世子は未來後生大事と子とを育てよ

八ッ橋にて狂歌の事

○參河の國八ッ橋は名にしおふ名所にてそののみ業平ものさつばたの五文字と句の上におきて
 歌よまれけるどや一休にもいかなる名所にや御覽のされたくや思召けんところの里人にあ
 んないさせて得らんするに八橋はあれてのさつばたもななくところせまきまで田とうゑてけれ
 ばいづれとやつはしども見もわぬていなりければ
 れどにさく三河にのけし八はまも
 田ばありありてのさつ葉たなし

とあるべされけるどや

瓢箪の曲遊の事

○一休和尙御手まへ拂底のじふんにて有けん一條もどりしの辻に高札と立られける
 一 此度日本老和尙一休三明六通と得て瓢箪とひつくり返す望の方々見ぶつある
 べき者也 今月今日よりはじめ申い

と遊ばされて紫野に芝居のまへ玉ひける事とて言はやしければ京わらんべ老若男女貴賤貧
 福とわのす足と空になして群集となし芝居もすみぬればさらは時分のよきとて一休多用意あ
 りは衣のまへに大ひある瓢箪とぶらり／＼と付たまひ兩手にばちと持て西より東ひんがしよ

り北北より南と飛めぐりはねのへりなんと幾度もなしたまひ大音とあげたんひやうく
とて二十けんばのりまのりはねまわりなとし玉ひて其後樂屋へはしりいり自身に大鼓と
ち給ひ是が、はりくとして残らす追出したまふ見物のものとも是はいの成事とて在るも
ありあるひは今にはじめぬ和尙のおどけ哉としばらくは口も得塞がぬ者も多のりけりとのや

浪人引立ありし事

○しばらく甲斐の國にどうりうのうちに一人の浪人は出いり申けるが一体さまは生歸にてまし
ますよし國中みなく申事にいへい何卒我がみの不自由なるとたのみ奉て身上にあり付い
う偏にたすけ給へとてひたすら願ひければ和尙もふびんに思し召され一門にてもなきやと
いせ給へは某が一門歴々まのりあれども尾羽うちがらしぬれば恥おはしくて参り得ず且は路
銀のよすがもなく不自由にて迷惑やと身あていあはれ和尙さまのほのげにて身軀に有つさ申
度よしひたすら願上ければ和尙うちうなづきのたまひけるは其方藝能はなに得たるや浪人
答へて萬事不調法にいと申上るいやくれば果とあれば禮樂射御書數のうち一々ゆび
折立てとひたまひとさ一つとして存せぬよし申上ければ扱は浪人したるも道理とにがし
くしばらく思案し給ひけるに彼浪人申には外にぞんじたる事なくいへとも故あつて教盛の舞
一番ぞんじていといふに一体さこしめして夫社日本一の事よとのたまひしみるく内談遊し
て不便よりするものとのたらひ其外鼓打などよびあつめ天晴云合せあり芝居にまくと打こ
ゝのしこに高札とたて給ひける

一此度上方より幸若羅下鞠進能仕鞠進元は日本老和尙一休

と遊されしのは侍にいふに及ばず町人百姓五里七里といとはず貴賤群集してさも廣き芝居に
小屋も破るゝはとに見へたる所への浪人しやうぞくつけ氣だのく身づぐるひして舞臺へ出
てあつもりと一番舞をまして樂屋へ入とひととく一人の男出てまこと御歴々權御入御見物
のだん有がたきなといんざんみ一禮とのべさて此つぎに何とあまはせ申さん御このみ次第
と申ければ多勢のけんぶつ口々に大戦くはんよいや高たちよ清しげよあと、思ひくと言は
やしけるところへ兼ていひ合せありけん五七人のあふれ者どもこのしこよりとぞり出てい
や外の舞は見たくなじあつもりと舞せよといふられたる男同じ舞の御たいくつにいはんとい
へばこのあふれもの共いや我々がすきじや教盛と舞さずんば芝居と踏くだらんいやつらみひ
しがんなせ、いふはとに又教盛と舞はしけるゝの舞はて、又前の男出て口上とふれければ又
溢れもの出ていやあつもりといふま、につけて四五番まはせける其後はまづ今日は御いと
まごひとて追出し木戸口にて明日は取のへゆらんに入る、評判とふれければ前の日よ人も人
は多く入ぬ御定のあつもり一はん舞はし次はといへば又前日の如くあねて仕くみたる事なれ
ば幾へんにてもあつもりよと七日までこそ仕たりける彼浪人たよりと得て一慶の身上となり
けるどのや所の地頭の耳おも入ぬれ共一休の事あれバとて御しゆりもなりのりける也

文錢の御咄し事

○ある人間ていはく和尙さま通寶の中に裏に文の字と書たる錢のひはいの成子細にて御講をた
づねければさればの事よむらしは亂國多くして親とらしみひ子とたづね我が身の住家を定の
あらずして寝食もわされ中々數の衣とらなね着といふはあらずと聞しに中むじのぞり

○ある人一体無情に生死のときはいふ心得てしるべきやと問ふ無情のいはく生死に過たるの無しと仰ければいふに有かたき心得申候死ての後いふらん火葬の、ちば芽草草とやならん汝何とて死後とはあるぞや自得せよ生あるものは必死あり平生臨終のときと思は、臨終のときも平生なり目前に死苦いたることも驚くに足らずして生死に念どひはせんば微塵も届とる事ありとて一絶と賦てあたへ給ふ

不^レ解^ニ因^ハ果^一受^ニ塵^一纏^ニ花^ハ止^ル水^ハ對^シ觀^ニ垂^ル柳^ハ邊^ニ明^ニ鏡^ハ本^ハ分^ル月^ハ下^ル客^ハ花^ハ長^ク興^ニ到^ル樂^ニ皇^ハ天^ニ

また問て如何の是佛一休答て曰

河伯來りて水と求は

河伯は水の神なり世界の水は我手のものとさし置て却て外に水と求むるがとく汝が本分の佛性と願て自知せよ

佛にはこゝろもならず身もならず

ならぬものことならぬなりけり

一絶と賦して云

無^レ始^ニ無^レ終^ニ我^ハ一^ハ心^ハ不^レ成^ル佛^ハ性^ハ本^ハ來^ル速^ニ道^ハ心^ハ本^ハ來^ル佛^ハ妄^ニ語^ハ衆^ハ生^ハ本^ハ來^ル速^ニ道^ハ心^ハ

しやのといふいたづなものか世に出て

多くの人と迷はざるみな

此歌の意は前篇にくはしく爰に略と

蜷川新右衛門 戲問答

○あるとき蜷川つれづれなる折ら和尚さまの許へまかりたはふれたる事と御尋申すとしてこのうたのこゝろはしらすと怒りくは

釋迦も達磨も定家家隆も

一休返歌に

釋迦達磨定家家隆もしらぬ歌

蜷川
おものげのらばらぬときはいはばあり
うはりてだにも命としさよ

一休
おものげはらばらばはれ年もよれ
無病ろく才死なばぞつとり

同 世の中にあさのせたちぬ花すゝさ
まわのばゆのん野へも山へも

○御一代のうちに狂詩の多ありしと前集に出しぬれど今またもれたると出す余の狂雲集

と見給へし

於^ニ一^ハ谷^ニ永^ニ三^ハ年^ニ三^ハ月^ニ天^ニ九^ハ郎^ニ冠^ニ者^ニ乘^ニ兵^ニ船^ニ

生 <small>なま</small>	花 <small>はな</small> 花 <small>はな</small>	夢 <small>ゆめ</small> 日 <small>ひ</small>	當 <small>あた</small> 有 <small>あ</small>	雖 <small>なほ</small> 垢 <small>あせ</small>	生 <small>なま</small> 類 <small>るい</small>	塞 <small>ふさ</small>
天 <small>あま</small> 同 <small>どう</small>	時 <small>とき</small> 咲 <small>さく</small> 同 <small>どう</small>	中 <small>なか</small> 夜 <small>よ</small> 戀 <small>こひ</small>	寺 <small>てら</small> 錢 <small>ぜに</small> 歲 <small>とし</small> 爲 <small>な</small>	耶 <small>や</small> 題 <small>だい</small>	食 <small>たべ</small> 朝 <small>あさ</small> 題 <small>だい</small>	目 <small>め</small>
成 <small>な</small>	花 <small>はな</small> 花 <small>はな</small>	携 <small>たづな</small> 思 <small>おも</small>	他 <small>ほか</small> 有 <small>あ</small> 且 <small>かつ</small>	人 <small>ひと</small> 塵 <small>ちり</small> 蚤 <small>蚤</small>	前 <small>まへ</small> 大 <small>おほ</small> 宇 <small>う</small>	祈 <small>いのち</small>
佛 <small>ぶつ</small>	亦 <small>また</small> 而 <small>して</small>	手 <small>て</small> 君 <small>きみ</small>	山 <small>やま</small> 酒 <small>さけ</small>	喰 <small>く</small> 耶 <small>や</small>	非 <small>ひ</small> 將 <small>まさ</small> 治 <small>ち</small>	念 <small>ねん</small>
閣 <small>かく</small>	可 <small>たがひ</small> 易 <small>やす</small>	欲 <small>ほつ</small> 長 <small>なが</small>	若 <small>わか</small> 有 <small>あ</small>	十 <small>じふ</small> 是 <small>これ</small>	磨 <small>あらい</small> 秘 <small>ひ</small> 川 <small>がは</small>	鞍 <small>くら</small>
思 <small>おも</small>	情 <small>なさけ</small> 老 <small>おい</small>	相 <small>あひ</small> 不 <small>ふ</small>	僧 <small>そう</small> 金 <small>かね</small>	分 <small>ぶん</small> 何 <small>なに</small>	墨 <small>すみ</small> 藏 <small>くら</small> 先 <small>まへ</small>	馬 <small>うま</small>
君 <small>きみ</small>	重 <small>おも</small> 花 <small>はな</small>	語 <small>ことば</small> 忘 <small>わす</small>	達 <small>たつ</small> 銀 <small>ぎん</small>	肥 <small>こ</small> 物 <small>もの</small>	後 <small>あと</small> 馬 <small>うま</small> 陣 <small>じん</small>	上 <small>うへ</small>

灯 <small>あかり</small>	花 <small>はな</small> 花 <small>はな</small>	被 <small>か</small> 夜 <small>よ</small>	未 <small>いま</small> 今 <small>いま</small>	瘦 <small>うす</small> 元 <small>もと</small>	楓 <small>かへ</small> 宇 <small>う</small>	七 <small>なな</small>
下 <small>した</small> 吟 <small>ぎん</small>	落 <small>おち</small> 頭 <small>かみ</small>	駭 <small>おどろ</small> 深 <small>ふか</small>	申 <small>まを</small> 歲 <small>とし</small>	僧 <small>そう</small> 來 <small>きた</small>	原 <small>はら</small> 治 <small>ち</small>	花 <small>はな</small>
詩 <small>うた</small>	花 <small>はな</small> 花 <small>はな</small>	曉 <small>あけ</small> 戀 <small>こひ</small>	案 <small>あん</small> 初 <small>はじめて</small>	一 <small>ひと</small> 見 <small>み</small>	源 <small>げん</small> 川 <small>がは</small>	八 <small>やち</small>
瘦 <small>うす</small>	過 <small>すか</small> 盛 <small>さか</small>	鐘 <small>かね</small> 暮 <small>く</small>	内 <small>うち</small> 成 <small>なる</small>	捫 <small>ひか</small> 來 <small>きた</small>	太 <small>ふた</small> 先 <small>まへ</small>	裂 <small>さ</small>
十 <small>じふ</small>	誰 <small>たれ</small> 夢 <small>ゆめ</small>	又 <small>また</small> 臥 <small>ふし</small>	往 <small>い</small> 大 <small>おほ</small>	沒 <small>な</small> 更 <small>さら</small>	一 <small>ひと</small> 陣 <small>じん</small>	扇 <small>あふぎ</small>
分 <small>ぶん</small>	聞 <small>き</small> 中 <small>なか</small>	斷 <small>こと</small> 空 <small>そら</small>	來 <small>きた</small> 德 <small>とく</small>	生 <small>なま</small> 無 <small>なし</small>	鞭 <small>むち</small> 給 <small>たま</small>	真 <small>ま</small>
	花 <small>はな</small> 花 <small>はな</small>	腸 <small>はら</small> 床 <small>とこ</small>	類 <small>るい</small> 人 <small>ひと</small>	涯 <small>はた</small> 骨 <small>ほね</small>	遲 <small>おそ</small> 之 <small>これ</small>	中 <small>なか</small>

與 <small>よ</small>	一 <small>ひと</small> 我 <small>われ</small>	移 <small>うつ</small> 東 <small>あづま</small>	敦 <small>おと</small> 打 <small>う</small>	林 <small>はやし</small> 鳥 <small>とり</small>	并 <small>なら</small> 有 <small>あ</small>	源 <small>げん</small>
一 <small>ひと</small>	題 <small>だい</small> 生 <small>なま</small>	此 <small>こ</small> 題 <small>だい</small>	得 <small>え</small> 山 <small>やま</small> 落 <small>おち</small>	盛 <small>さか</small> 落 <small>おち</small>	又 <small>また</small> 間 <small>ま</small>	亦 <small>また</small> 題 <small>だい</small>
源 <small>げん</small>	那 <small>な</small> 不 <small>ふ</small>	貧 <small>ひん</small> 男 <small>おとこ</small>	天 <small>あま</small> 々 <small>々</small>	髮 <small>かみ</small> 熊 <small>くま</small>	平 <small>へい</small> 題 <small>だい</small>	花 <small>はな</small> 說 <small>いわ</small>
平 <small>へい</small>	須 <small>す</small> 須 <small>す</small>	綱 <small>つな</small> 裸 <small>はだか</small>	根 <small>ね</small> 台 <small>たい</small>	下 <small>した</small> 之 <small>これ</small>	谷 <small>や</small> 來 <small>きた</small>	一 <small>ひと</small> 若 <small>わか</small>
第 <small>だい</small>	與 <small>よ</small> 美 <small>み</small>	八 <small>やち</small>	眞 <small>ま</small> 王 <small>おう</small>	時 <small>とき</small> 進 <small>すす</small>	無 <small>なし</small> 谷 <small>や</small>	諸 <small>しよ</small> 似 <small>に</small>
一 <small>ひと</small>	市 <small>いち</small> 人 <small>ひと</small>	寸 <small>すん</small>	羅 <small>ら</small> 毛 <small>もう</small>	運 <small>うん</small> 數 <small>かず</small>	善 <small>ぜん</small> 度 <small>ど</small>	江 <small>え</small> 全 <small>ぜん</small>
弓 <small>ゆみ</small>	手 <small>て</small> 強 <small>つよ</small>		漢 <small>かん</small> 頭 <small>かみ</small>	速 <small>すみ</small> 兵 <small>へい</small>	薩 <small>さつ</small> 他 <small>ほか</small>	水 <small>みづ</small> 圓 <small>まる</small>
判 <small>はん</small>	憤 <small>ふん</small> 夜 <small>よ</small>	平 <small>へい</small> 今 <small>いま</small>	一 <small>ひと</small> 九 <small>く</small>	中 <small>なか</small> 樹 <small>じゆ</small>	吐 <small>つ</small> 不 <small>ふ</small>	海 <small>うみ</small>
官 <small>くわん</small>	鼻 <small>はな</small> 來 <small>きた</small>	生 <small>なま</small> 日 <small>ひ</small>	朝 <small>あさ</small> 郎 <small>らう</small>	有 <small>あ</small> 頭 <small>かみ</small>	出 <small>で</small> 離 <small>はな</small>	底 <small>そこ</small>
召 <small>めい</small>	禪 <small>ぜん</small> 抱 <small>だいて</small>	所 <small>ところ</small> 出 <small>い</small>	懸 <small>か</small> 冠 <small>かん</small>	黃 <small>わう</small> 樹 <small>じゆ</small>	趙 <small>ちやう</small> 色 <small>しき</small>	死 <small>し</small>
道 <small>だう</small>	中 <small>なか</small> 汝 <small>なんぢ</small>	望 <small>のぞ</small> 家 <small>か</small>	向 <small>むか</small> 者 <small>もの</small>	鶯 <small>うい</small> 庭 <small>てい</small>	州 <small>しゆ</small> 相 <small>あひ</small>	人 <small>ひと</small>
射 <small>しゃ</small>	日 <small>ひ</small> 臥 <small>ふし</small>	一 <small>ひと</small> 作 <small>さく</small>	上 <small>うへ</small> 大 <small>おほ</small>	小 <small>せう</small> 妙 <small>めう</small>	一 <small>ひと</small> 絶 <small>たつ</small>	幾 <small>いく</small>
成 <small>なる</small>	月 <small>つき</small> 空 <small>そら</small>	時 <small>とき</small> 比 <small>ひ</small>	時 <small>とき</small> 高 <small>たか</small>	釋 <small>しやく</small> 音 <small>おん</small>	味 <small>あじ</small> 諸 <small>しよ</small>	萬 <small>まん</small>
功 <small>こう</small>	長 <small>なが</small> 床 <small>とこ</small>	丘 <small>かみ</small> 休 <small>やす</small>	聲 <small>こゑ</small> 名 <small>な</small>	迦 <small>か</small> 多 <small>た</small>	禪 <small>ぜん</small> 縁 <small>えん</small>	千 <small>せん</small>

有	力	秋	性	中	三	在	題	飯	怒	布	大	學	湘	今	扶	東	狂	國
力	秋	性	中	三	在	題	飯	怒	布	大	學	湘	今	扶	東	狂	國	同
不	應	不	靈	央	酒	便	囊	腹	依	袋	食	漁	道	江	辭	桑	日	同
不	應	不	靈	央	酒	便	囊	腹	依	袋	食	漁	道	江	辭	桑	日	同
拂	拂	拂	拂	拂	拂	拂	拂	拂	拂	拂	拂	拂	拂	拂	拂	拂	拂	拂
胸	胸	胸	胸	胸	胸	胸	胸	胸	胸	胸	胸	胸	胸	胸	胸	胸	胸	胸
關	關	關	關	關	關	關	關	關	關	關	關	關	關	關	關	關	關	關
斷	斷	斷	斷	斷	斷	斷	斷	斷	斷	斷	斷	斷	斷	斷	斷	斷	斷	斷
楚	楚	楚	楚	楚	楚	楚	楚	楚	楚	楚	楚	楚	楚	楚	楚	楚	楚	楚
山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲	雲
人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人
言	言	言	言	言	言	言	言	言	言	言	言	言	言	言	言	言	言	言
是	是	是	是	是	是	是	是	是	是	是	是	是	是	是	是	是	是	是
座	座	座	座	座	座	座	座	座	座	座	座	座	座	座	座	座	座	座
禪	禪	禪	禪	禪	禪	禪	禪	禪	禪	禪	禪	禪	禪	禪	禪	禪	禪	禪
工	工	工	工	工	工	工	工	工	工	工	工	工	工	工	工	工	工	工
夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫	夫
無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
字	字	字	字	字	字	字	字	字	字	字	字	字	字	字	字	字	字	字

飛來 編纂 堂理 怪長無明滅法燈

○はちす葉のにむりにそまぬ露の躬いたく其まゝの真如實相
 ○佛とてはるふもとむるころころまよひの中のみまよひなりける
 ○ちればささ喉は又ちる春との花のそがたは如來常住
 ○ぬらしつる袖のみみだののりくまもなき面うけの月を立そふ
 ○おのすあら躬はいたづらに成にけりこくうと常のそみ家と思へば
 ○ありの世にあたる露の躬とちて千とせといふ人のはるあさ
 ○世のうさるへてすみぬる柴の戸に問はじはなぬ人もうらめし
 ○妙なりて法のはちすの花の躬は幾世ふるとも色はあらはらじ
 ○其まゝにうまれながらの心ころねがはずともはとけなるべし
 ○露とさへまぶるしと覺え稻づまのうげの如くに躬は思ふべし
 ○なげくあよ誠の道いそのまゝにふたつともなく又三つともなし
 ○らくくど心にてこそ彼岸あわたるもやすき法のふな人
 ○生死のことはしらぬ坊さまは犬の衣とさたるあるべし
 ○奥山にむすばすとも柴の庵こゝるあらにて世はいとふべし
 ○國いつく里はいらにと人とは、本來無爲の物とこたへよ
 ○燒きて、灰になりなば何ものも残りて苦とは受んとぞ思ふ

- 妄執の雲とはらさで終る躬のあり果と見よ地ぞく成らん
- けふりたつ野邊のあはれといつまでうよ所に見なして躬は殘るらん
- ひ、くに行末とほく成にけりいつとらぎりのいのちなるらん
- 關もりにわが心とやのしぬらんすやなる道と行ぬる躬は
- すみのぼる心の月の蔭りれてくまなきもの日本の境界
- はらなくもあすの命とたのむ哉きのふは過し心ならずや
- さとり得て心のやみの晴ぬればじひもなさけも有わけの月
- 三日月のみつればのけて跡もなしとあらくにまたあり明の月
- はる事に咲るさくらと見るとになははのなしと躬こそつらけれ
- 待得てもはどはななりし郭公ともとさそひていつち行らん
- 年々にしぐれのそむるみち葉と四方のうつらふためしともしれ
- 月は家こゝるは主と見る時はなほうりの世のそまゐり也けり
- こゝろとば墨の衣に染なして躬とはうき世の道にまゐせて
- 寺と建堂とたてたるくどくよりたゝ常のじひやましあん
- じばしげにいさの一筋のよふは野邊ののねもよ所に見えけり
- 色相は其どきくにははるとも不生不滅のこゝろのらし
- 見ることに皆そのまゝのそのた哉柳はみどり花のくれなる
- 前篇に一体和尚母君へ水のゝみ目なし卿なんといふのな書法語と書て進

せられしのちまた昔よりの祖師知識方の教化ありし言の葉とひきてのな文
 となし念頃に示し給ひし文

往昔今に至りまでうき躬の有さす夢の如くにさへ思めされしへは何事も御心のとまる事御さ
 らましくい愛と佛御くはんねん有て法華經の文に觀彼久遠獨如今日と御のべし此文の意は
 の久しきととき事と見給ふに同じく今日のとくに見給へとの事とて天地ひらけはじまり
 しより己來のはるとなしと萬の事とさとりたまふとの御事にていしければさのみ深く御不審
 あるましくい佛法と申は生者死苦といましめ給ふのみさらに心とめても其のひるみと
 見まひらせいと先禪家にもちひ申事かやう申し事證據なくいへは如何とおぼし召候やと存じ
 めしのとと大のた引申入の都に夢想國師とも日本にのくれなき御僧のましくける其頃は
 氏將軍の代なりとの夢想こくしさとりの御歌に

夢の世ふゆめのとくに生れ來て
 つもときへなん躬こそやすけれ

夫人間のありさす萬事とまる事なしもとより生のはじめとしらざれば死のとわりとわかま
 へずやみくぼうくとして苦みの海にしづむなり佛こゝと哀とおぼしめして色くのほうへ
 んにて衆生とそぐひ給ふされども人間のこゝろ不同にして惡道へあゆみとすゝみ善方へは心
 すゝみかたいたづらに光陰とわくりあはれみの業果たへすたまゝ教にたがふといへども
 名利の善となすとべのりなり名利と申は其躬の名とわけ人にとめられんと思ふ心とたねとし
 て堂塔と建立しとさの富貴におこれり斯の事くの人と佛のふのくさらはせ給ふまことの道は

萬事法度とそむらず世にしたがひてうたふ法と守る人と佛道に成就の人とすなり御存の御
くれ近く成らせ給へば何の御望御さひはんや殊さらざん人の話ともしるしめされはうへは行
く水のごとくに浮心ともたせ給ひて浮胸のうちは何事浮さなくはへは世尊御一代の御躬と
座あるべくはこゝとはとけ三部經に己心の彌陀唯心の淨土との玉ふ此文字の心はふのれ
こゝろの彌陀たゝこゝろ淨土と申也しるれば十萬億土は御ねらひあるまじく候
佛とはなにといはまの苦むしろ

たゝ慈悲心にしくもぞなし
此うたのごとくに御じゆよう候へば何事も佛心と見まゐらせ申べく候古しへ舟田の御はうじ
かうにて宗建をばじめまゐらせ人々すぎさせ給ひ候事夢とはればしめされず候や申までもつ
くしがたきはのやうにけなげに御入候てわたくしもながらへ佛法の御事とも申上まゐらせ候
御事の他生の縁ふらくとぞんじ候因果經に自以唯あらんと佛も御のへ候また母にてはもの
七十六にて去年相はてられは必昌と申せし辭世の歌

世々ことに見えつうくれつすむ月の
うはらぬ色とたれらしらまじ
此歌とくらみみて其のちはそれさまへ参りて御菩提の心とすめ申はへとくもへし申さ
れみつるの御めいとそむきがたくぞんじはてたびく参りみつる母にてはもの事おもひ
出し参らせしへは一しはそなたへ参りるく社へははやられさまの御覺悟も大あんなくの道に
御心つさしへはめで度満足いたしし御なぐさみな終には御うんさふもしうるくへは御心つく

しては夢の御沙汰はましくは大般若の文に一切不行と佛の行とと御座は愛と得つて昔はあ
知識のへに

あら樂や虚空と家と住なして
こゝろにうくるそらさへもなし

出るども入とも月とあはねは
心にもゐる山の端もなし

これは生死にとりあはぬどころの歌にてはよくく御工夫あるべくは又弘法大師の御辭世に
今は、や後世のつとめもせざりけり

あらんの二字のあるにまのせて
いつれもさとりの人にはやうに日まあさしやう申おられはまた慈鎮和尚のうたに

のりの世にまた旅ねしてくさまくら
めめの世にまたゆめと見るのな

引よせてむとば草の庵にて
とくればもとの野はらなりけり

是は色相の上とゐるく思し召候へどの心にては何の日いつの時御大事來り参らせしとも御心
の中に何事も思召ひまじくは病難もしいたくせめ來しとも其苦しみにまのせて相果しへと大
唐の黃檗禪師の傳心の法要と申にも書置れ日本にては聖徳太子病なんのとき御歌遊ばされ候
うさ雲はいくへもろれ空に消

月はくまなきひあり成けり
此歌の心の何事も取合ひはで無念無想の所と用ひひへとの御事にては又ゆらの開山の歌に
何事も夢まほろしとさとり來て

うつゝあき世のすひなりけり

此哥のこゝろはいはある大王ささき其外上下の人々のなしみ給ふは死の道にて候こゝとさへ
御のくご候へばそなはち安よりの淨土九品のれんげにまどはれて大安樂の御躬となせられたま
ふべし大世尊の御說法にも女人成佛のあたき事とくとき給ふのやうの事と聞こしめして御
道心すてさせ給ふまじく其ことたりとしや申あげひ男子に生とうけ申ひてのこらす成佛す
べきにあらずとに龍女は八才にして三國に名を馳し申ひ御經もはめ給ふ然は女人こそあは
もたのもしき御事にては佛ば成しとてべつにたつときひがりもはなち奇特とも見せ申事はあ
るまゝくひ御さどりの御心中にこれぞ淨不審ひはぬと思召ひ事御座なく候と大のさとりと申
事にては佛御入滅のち祖師先徳のさたも給ふ御法にも見理受用のふたつにて御入ひ三ぞく
とも御太儀に思しめしましく候五戒百のい五訂のいとたてられひ事もたゝ一身のさたにて御
入ひ御女房衆の御さとり有しは後嵯峨天皇の御ささき檀林皇后なり其外人の數としらす美濃
のくにゝは興性寺の千代能と申女さとりては其歌に

とにのくにたぐみし桶の底ぬけて

水たまたねば月もやどらす

のやうの事と聞しめして今日より禪宗のさながくに御必とあらし玉ふべし愚僧御手と引申そ

べしまづくくさくの御心とたゝせ給ひ後世と御たすのらひのんと御のくごひへとすゝめ
申もの何者ぞや又のやうに不審とうけ申ものは何ものぞやと目に見ゆそしてさまゝあり
ゆくゆゑに六道りんゑのたねと成事と佛これと三ぞくと説給ふ一おけんどん二おいのり腹立
ると三にぐちの心この三つとたちひへといにしへ今にいたるまでしめすなりこれとしらされ
ば愛じうの心ふのき故に人とねたみそしりあればうらみこんじてたがひに苦しみのなみだ
流し袖としぼるなり是みる一心のわざなり久しく遠き事と觀じ物とわすれざるも一心なり四
百四病とうけ大苦とうくるも一心也雪霜のさむき事といひ大温と苦となすも心なりされば
此心一ツと取とのがたければ六道のこらたへず生に生とのさぬ死に死とつぎうき沈むのみな
り此心といふものはいかにとばんじ申に影のたちもなきものありのたちなき故に消うせずし
れば生もなく死もなしと佛とも金剛の正休とも給ふなり無相にして有たるが故に
古來より行とまるとなし佳所さらになし色相の生滅におづるによつて無常と説き又は
大死とのべで是と感みのなしけて定離と申也のやうに申入候は御心にのたちなき所と御らん
さられひへと申事にては何もの色相とさつて佛神とも鬼神とも成申べくひなり淨土と穢土
の事とゝ以て御分別あるべく候御不審のれ申候はまよひの雲千重萬里の外にのるひ一
つとして御心と、まる事あるまじく候こゝと大正覺と申なりこゝにいたりて心經にも色即是
空空即是色とゝ給ふ一心の外にべらのものなし本より經にもなし心は無始覺終にして住所
なし爰と開て天地草木の畢竟して見る法はあさく候見ざる法はふのしはやくゝ生死のさづな
とはなれて大解脱の御身とならせ玉ふべし

御工夫にも古則話頭御不善はなれ候よし仰られ候尤に候むのしの御僧たちの集め給ふなそら

へとあらしくのみにてはなぐさみにしるし參らせ候
本来の面目のしめしやう不思議不思議未生已前いつれの所より来る又はいふなるが是本來の
めんぼくと斗もとひや候此言葉とかけとりて三十日五十日乃至一年二年くふうとどげと衆せ
申やうは我が身の生の所は佛もいづれの祖師もしられましく候佛祖ふしきの所是にて候と申
僕へは此上にじもようどていろく大事あるよし長老やされい問また是と工夫してややうは
天地開闢よりこのうた知られまじきとじもようそ愛にて長老尤のよし申されい學者の體に
じえによつて其語とするなり大のた此分にい

はくじゆしの話頭とていなるる是ろしさいらに意といふて祖師のいはく庭前の栢樹
子とてたふ心とせんせよと申にしるふして學者の曰祖師の再來庭前のはくじゆしも同法必に
てはは、天然の理にては前後しらぬ心にてはとてぢやく語に松は直く荆はまがれりと申又色
相分離してのちいふはもとふ松直のちす荆曲らずと申三度四度やへてこれと至極の道理
とすす是は柳はみどり花はくれみひのこゝるあり此極意は口といふ根本無要なる處としらん
がためあり大のた此分に候

萬はうふりうといふ古則よろづに友たらざる人これ何人ぞやと問ふがくしや耳とらばたて
是と聞き年月へて申やうは我が一心は萬法の外にて候昧も色もなく候物にくみせぬものに候
じのも天にははひ地に満りしければ左右もあく脚下まなくとして有ける故に法界一心とく
はんじて大國のはう居士名を獲すこれは目に見ぬ物の有所と見出しふふくのとく申也地獄此

どきやふれ申し御心入也

本有圓成の事はんらい佛何の因縁ともつてめいとふの衆生となりたるぞや學者くようじで申
やうは根本は無念無相の佛あると衆生の色縁にひられてのやうに寒うん苦樂と得る身となり
來ては愛に念とといめ此界にらんるなくは本身の佛性になるとて此とき種々無量となしさま
く言葉とつくし善根しやうと見るあり

そのた話の事釋迦みるくいのれが奴るればたるこのさとりとうけて年月へて老僧の前へ出て
座上に和尙無く眼せんに我あしと申て一味平等のどころ何の差別あらんや然らば奴もなじ我
もあし上下元來佛も衆生も一昧ならずや大のた此分の心にて候

いなるのこれ地獄としめされて年月と経て工夫して申そやうは眼前これ地獄と申又とふ何
事に地獄を色相これぢぢくなり色相分離してはいのお眼光落地とてに見えず智慧によつて
種々の業とうけ大利益無お落候てあさましくい

こはんのけざるどきはいはん學しやのいはく小魚大魚と吞又のけてのちいひん大魚小魚との
む此心は舟の帆かりてあるどきは大なる魚がちいささうとのむといふ也はののらざる
ときは小なる魚が大なるのむといふこゝるなり此こゝるは諸宗に少しも知らず禪家の大
事なる有と申さんとての世にある事と吐く語となくし又無ある事と申さんどては世になき事
と吐て心となくして生死思推の處とむつらしく申さん爲なり御理り御座い直に申べくいなり

りんさいの三よう三支と申事のいひやうの事は申つくしがたくい天地の間に三つもとむ三つ
くろしと申事何ぞや是としのも三やうと申事ありとく心の父母と我と是三つの寶なり一

つものけては物ならずし三玄と申のみなもとの無性はくろさのたちなり出生して萬の事と行
 ひん爰に大秘密の事ありやうの字これ則大事なり
 大國のなんせん和尚此猫兒と切る事は大衆こたへざるゆるなり趙州爰に來つてさうあひと取
 てのしらへあげ衣と親にあて、和尚のまへに出る和尚のとさねこと切て後悔すてうじう甚
 もつてめんばく成る第一に色相の逆意とさるなり迷ひの衆生色心どもに切と得すたま〜
 切といへどもとんだとなれば放る、所ふし文珠のりけんはふた、びつがすと申心にてい
 りんさいの四のつとて人の死たる所にいたりてのつそこの心たしに心得たる僧まれなりた
 いじやうしゆう僧と申は本ぶんにととしてこれと至極と古人の見理此所にあらずすでにりん
 さいは命根本不絶といへりしければ當時の僧たち大なるあやまちなりといひみぢくにして衣と
 ろへ人の目とつぶして布施物とり己が生々世々のはとまねくあはれむべきの第一なり
 百丈やこの話の事大しゆぎやうていの人へつて因果あるや又なしやと、ふ答ていはく因
 果に落すとなり此報によりて五百生野狐の身に墮していんぐははれさ然あるものと申たね
 にてい未さとらずして別にふのき事御座はんと思召まじく候此ふたいの因果と申はいん
 ぐはにくらゐらずとの事なり深く因果とはおちすといふ候にてい此話問のまゐこは生々世々
 の事とさつねによせてとられたる所大智なるもゑお大智禪師とや申あり一朝大國にてい
 ろ佛道しゆ行の事れん〜に申上まらせし又申す人迷ふときは火とつて火とけさんと
 し土とつて山とてはんとそのやうなる事人々佛道に心の遠さある事萬里とへだ
 て、手には百八ぼんあうのさづなる珠とつまぐり二世三世といのり生れう死れうのた、

りて見いだし石塔卒都婆にさどくのありとおもひ梓にのけて死人と言葉とのはと事といひて
 袖としぼるもろ〜の教もろ〜の道理と失ひ佛ぼさつにまう語りのけ義理とそむき彌〜
 もらもくのとく竹のうちより天とはある物は生々世々うとむとあるべゐらず西方非西方非
 東無地獄無極樂淨土非淨土けんどんとさらずしてしのも又しかも外の大空さんまいにして大
 蓮化のうちにあつた、正直のじさぎやそ無さんなり念とさつてしのもさらず是と通力自在の
 さうと申也のら國我朝にいたり上下萬民佛道とねがふ事何宗のしうとて色々た、てはありと
 いへども其源はいつれも極樂じやうとにいたり地獄におとまじさとの方便也此淨土といふ
 の何國なれば我心のうちにあつた又地獄はいつれぞなれば大事我心のうちにあつた或人達大師
 にとふ地獄はいつれの所ぞやこたへていはく汝の心中にどんじんちの三毒これなりどんじん
 ちとは貪は欲とく萬の愛念執着の欲と申なり慎とは腹とたつる念と申痴とはぐちとて何事も
 心のまゝにあつた事となげき歎しみ我とわが心と悩ませ事と申なり此三毒のくの如く善惡の報
 とつくり出し地獄にあつるなりぢとて別に余の世界にある事にてはあらず又問極樂とは
 いつれのところぞやこたへていはく極樂淨土とて外にあるべゐらず汝が心中の三毒と拂ふ處
 とおはち淨土なりと答給ふ佛と衆生とへだて有る事あし迷ひの衆生此どんじんち我本心にてな
 き事としらず一念あひし又にくむひよりて地獄にねつるなりこの三毒ともなして八萬四千
 のぼんのう發るなりこれ則地獄なり佛といふもさるといふも名はのほはれとも同じ道也わが
 本心とさると人とそなはち佛と名つくるありしれば我心の外に別に佛なき事とよく心得て
 此上と常〜こ、るにのけ御工夫あらば道に御あたりはん事うたのひあるべゐらず候現在の



五十一 庵川十川



五十二 庵川十川

果と見て過去未來としると御經にときわめられ候この心は今こゝにて惡心惡逆とて、るにむす
 れずしてつゝ、しみ善事の心あつて取出し行ふ事也今此生にて其心とむすれば又今の心と未
 來へ引て人に生といたすべきとの事なり佛は萬の自在と得たりといへども見あたらざる事あ
 り一に無縁の衆生度するとあたはず二には衆生といつくる事あたらず三にはさうごう轉
 ずる事あたはず前世のうらいにによりあんとくしたる善惡のこつらなりあやうの決定の業
 はうとば佛はさつこの身にても轉するとなはず形の善惡福徳の大小壽命の長短衆生の高低
 の事こらず皆前世の業因にたへたる定業なり慈悲しんは福徳の家にうまれ慳貪は貧苦の身体
 かなり柔和にんにくの心もゑそがたよく生れさては高位高家にうまるとなり殺生したるもの
 は短命にうまるとあくのよくいづれもみな前世の惡ゆゑなり惡果と得たる人このことはい
 としりて今世にて惡行とつくりすば來世はあならず善果と得べき事唐土わが朝の祖師達とは
 じめ數多き知識のふみにも書殘し給ふ事どもとしめし參らす

一休諸國物語拾遺 畢

明治廿二年七月八日印刷
 全 年七月九日出版

著 者 不 詳

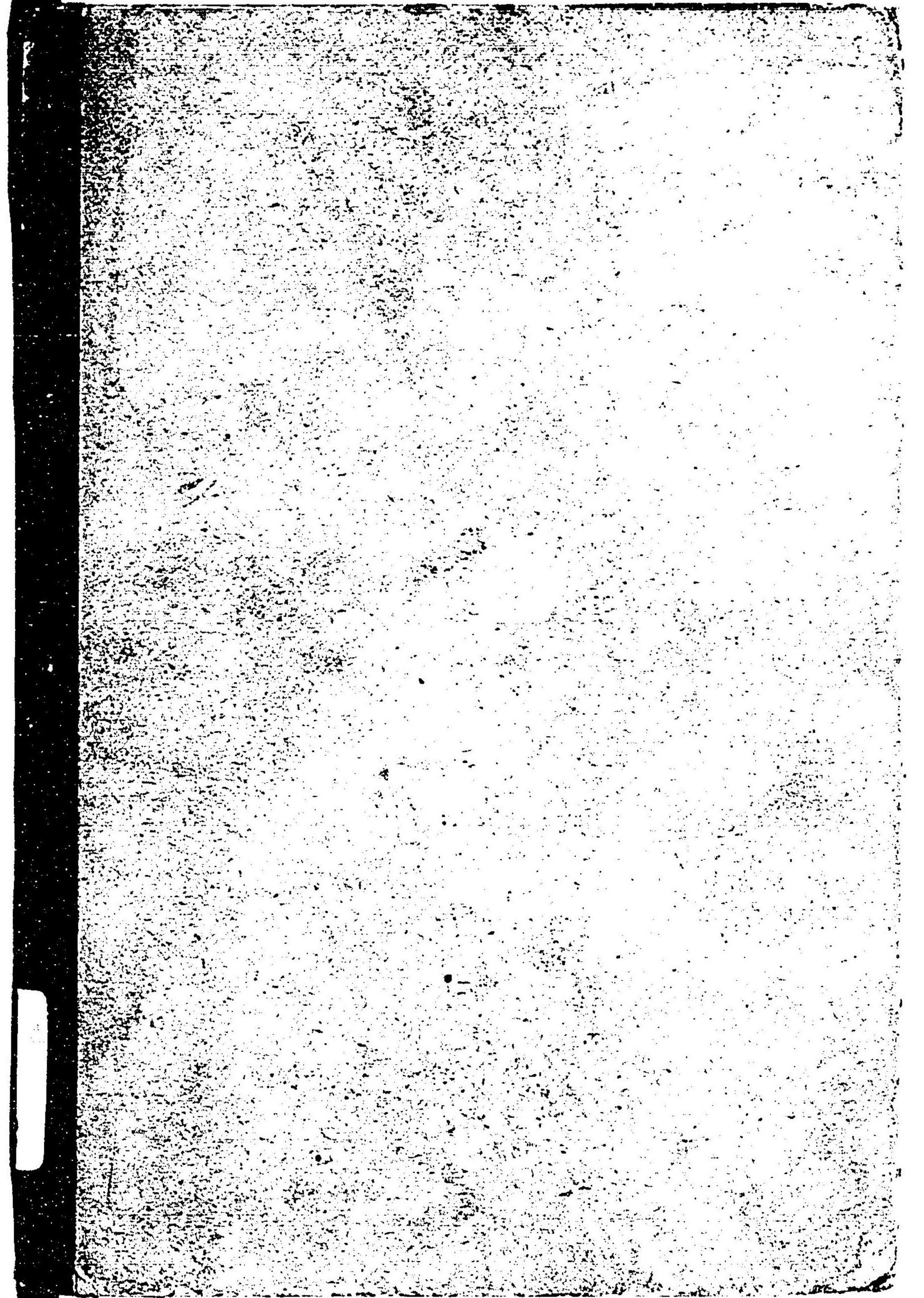
神田區松枝町廿四番地

發 行 者 門 戶 平 吉

本郷區湯島一丁目十三番地

印 刷 者 松 本 秋 齋

發 賣 所 目 茶 安 堂



2119
2
85

物語
一休



特

089862-000-0

特12-433

一休諸国物語

平田 止水/編

M22

DBN-0137

